# 148

2025 SPRING

# 美術館NEWS

収蔵品の紹介 Vol. 19

坂田一男《坐る女Ⅲ》
大正15(1926)年
油彩・カンヴァス
91 × 59 cm

岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

# 映画を展覧会に

福冨 幸（副管理者）

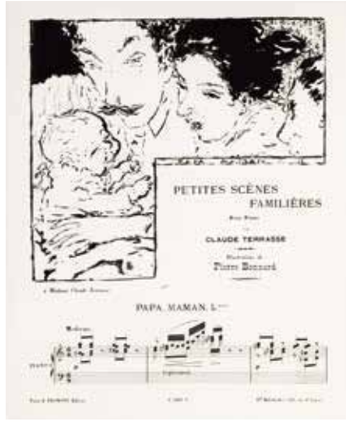
「ディリリとパリの時間旅行」（監督：ミッシェル・オスロ、仏・独・白 2018）というアニメーション映画をご存じでしょうか。マイセン動物園展（2020年 131号紹介）に続いての映画の話で恐縮ですが、2025年春の特別展「ベル・エポック―美しき時代 パリに集った芸術家たち ワイズマン＆マイケル コレクションを中心に」は、この映画にヒントを得て企画しました。（僭越ながら、私が…）

舞台は19世紀末から20世紀初頭の黄金時代、古き良き時代と謳われるベル・エポック期のパリ。フランス領のニューカレドニアからやってきた1人の少女ディリリが、配達員の青年を道先案内人に美しいパリの町を駆け巡りながら、個性豊かな大人たちと出会い、助けられ、連続少女誘拐事件を解決するために活躍します。この映画には、ロートレック（画家）、キュリー夫人（科学者）、ピカソ（画家）、サラ・ベルナール（女優）、パスツール（細菌学者）、ルイーズ・ミシェル（教育者）、マルセル・プルースト（作家）、シドニー＝ガブリエル・コレット（作家）、ドビュッシー（作曲家）、ギュスターヴ・エッフェル（技師、構造家）、ルノワール（画家）、ドガ（画家）、マティス（画家）、セルゲイ・ディアギレフ（ロシアバレエ団創設者）、ロダン（彫刻家）、モジリアニ（画家）、モネ（画家）、アンドレ・ジッド（作家）、ブランクーシ（彫刻家）、リュミエール兄弟（映画の発明者）、ラヴェル（作曲家）、カミーユ・クローデル（彫刻家）、ガートルード・スタイン（詩人）、ジョルジュ・クレマンソー（政治家）、レイナルド・アーン（作曲家）、ポール・ポアレ（ファッション・デザイナー）、シュザンヌ・ヴァラドン（画家、ユトリロの母）、グレフュール伯爵夫人（パリ社交界のパトロン）、ショコラことラファエル・パディーヤ（サーカス芸人）、サティ（作曲家）、ボードレール（詩人）、ベルト・モリゾ（画家）等々…すべての人物を同定することは難しいのですが、フランスの、世界の近代史に輝かしい功績を残す芸術家や科学者等が100人以上も登場します。教育的要素が加味された子ども向けの映画ですが、フランスがこの時代、いかに文化的に多様で生き生きとしていたかがよくわかり、また子ども向けとはいえ、貧困やジェンダーなど現代においても簡単には解決しえない課題を冷静に描き出している点も評価できます。

ディリリが見たパリを追体験するような展覧会ができないかと、かつてフランス印象派の陶磁器展やエルミタージュ美術館展を一緒に開催した企画会社の市川さんに持ちかけたところ、フランス在住の美術史家デニス・ケイト氏に繋いでくれました。ケイトさんはお孫さんとこの映画を7回も見た！という返信とともに快くフランス側のコーディネートを引き受けてくれました。こだわったのは、ディリリが様々なアーティストと出会ったように、ジャンル横断的にこの時代の美術や音楽、文学、科学などを紹介することです。経費的なことを鑑み、フランスからはワイズマン＆マイケルコレクションの中から核となる作品をセレクトし、国内に所蔵される作品をプラスすることにしました。特筆すべきはルノワール、モネ、シャガール、ミュシャといった人気の絵画作品のほか、文化学園から女性のファッションの移り変わりが分かるドレスやアクセサリー、服飾雑誌等を、また獨協大学、東京外国語大学、甲南女子大学、明星大学の各図書館から初版本や書簡等貴重書類をご出品いただけたことです。大学にこれほどの貴重書類があることはあまり知られていないのではないでしょうか。びっちりと書き込まれたプルーストの校正刷、チャイコフスキーの踊るような筆跡の手紙など、作家の生きた痕跡が感じられ、心ときめきます。残念ながらクローデルは諦めましたが、井原市立平櫛田中美術館から彫刻家ロダンのユゴー像をお借りしました。ユゴーの詩の一節を刻み込んだガレのガラスも特別出品します。マラルメの「半獣神の午後」の詩にはマネの挿絵がつき、ドビュッシーが前奏曲を作り、後にニジンスキーが振付しバレエに展開。半獣神は狩りの女神ディアナに紐付くことからカバネルのディアナを展示します。芸術家同士のつながりや主題の展開にも関心を寄せていただけたら楽しいと思います。サティの詩と音楽、リヴィエールの影絵芝居の映像等に関しては東京藝術大学の協力を仰ぎました。自然科学をどう展覧会に取り込むか、作品として展覧できるものをなかなか見つけられず、キュリー夫人を中心に女性科学者について研究されている川島慶子氏（名古屋工業大学名誉教授）に寄稿、講演をお願いすることにしました（マリー・キュリーの実験室ノートは作品保護のためパネル展示）。川島さんもディリリの映画を4回は見た！と意気投合。マリー・キュリーが生きたベル・エポック期についていろいろとご教示いただきました。

最後にミュージアムショップには岡山市内で人気のフランス洋菓子店の焼き菓子も並びます。この時代の洋菓子といえば･･･、マドレーヌは欠かせませんね。

「ディリリとパリの時間旅行」© 2018 NORD-OUEST FILMS – STUDIO O – ARTE FRANCE CINEMA – MARS FILMS – WILD BUNCH – MACGUFF LIGNE – ARTEMIS PRODUCTIONS – SENATOR FILM PRODUKTION




ピエール・ボナール《『ピアノのための家族の情景集（C. テラス曲）』より》1893 栃木県立美術館

テオフィル=アレクサンドル・スタンラン《シャ・ノワール》1896 デイヴィッド・E.ワイズマン＆ジャクリーヌ・E.マイケル ©Stéphane Pons

【特別展】「ベル・エポック―美しき時代 パリに集った芸術家たち ワイズマン＆マイケル コレクションを中心に」
（会期：2025年4月11日～5月18日）

# 収蔵品展示 満谷国四郎 ―新収蔵品と雑誌挿絵をまじえて― 第2篇

廣瀬 就久（主任学芸員）

満谷国四郎（1874-1936）は現在の総社市に生まれた。明治時代には戦争や社会風俗を写実的に描いて注目されたが、大正時代以降は画風が変わり、風景や女性を装飾的に描いた。当館は満谷の個展を1993年に開催した。そして収蔵品展示「満谷国四郎―新収蔵品と雑誌挿絵をまじえて―」を、2008年8月26日から10月3日まで行っている。その後14そして16、19、23年度に、満谷の親族や複数の所蔵家から多くの寄贈と寄託があったため、本展（第2篇）を実施した。

章構成は3つである（第1章：明治時代―若かりし頃、第2章：大正時代―画業の変化、第3章：大正～昭和時代―アジアへの眼差し／女性への眼差し／洋画と日本画）。

第1章では、《海岸風景》（1893-95頃、2023年度寄贈）と《裸婦》（1895、2019年度寄贈）［図1］などを展示した。満谷は画家になることを希望して91年に上京し、小山正太郎が主宰する不同舎に入った。2点ともこの画塾にいた頃の作品である。前者は、同構図の素描が東京文化財研究所にある。後者は、現在確認できるところでは、初めて制作した大形の裸婦である。茶褐色が基調で、陰影表現によって肉体の量感や肌の質感が描き出されている。

第2章では、2度目の欧州滞在（1911-14）以降の作品を取り上げた。ルノワールなどの印象派、セザンヌなどのポスト印象派、そしてドニほかナビ派の画家たちなど、フランスの美術における多くの動向が満谷に大きな影響を与えた。《鏡を見る女》（1916、2014年度寄贈）では色彩が明るく、輪郭線が強くなり、横顔はいくらか平面的である。第3章で取り上げる《朝の身仕舞》（1931）では、女性の肌は明るい平面のようになる。

第3章では、満谷が23そして24、26、29年と、4回訪中した時期の作品を紹介した。西洋人の模倣ではない日本人独自の油絵を描くために、欧州ではなく中国を取材の対象にしている。《臨江甘露寺（鎮江）》（1924）は2回目の、《蘇州風景》（1926、2019年度寄贈）［図2］は3回目の訪中を経て制作された。

満谷は展覧会で日本画を発表していない。自らの趣（おもむ）くまま、あるいは人からの依頼で日本画を制作したのであろう。余技とは思えない《蘇州風景》のような力作もある。画家は洋画と日本画を、どのような気持ちで同時に制作したのか。また美術館は、一人の画家が制作した洋画と日本画を、どのように位置づけ評価して紹介すれば良いのだろうか。

ある程度は満谷の画業をたどれる収蔵品展示になった。23年度寄贈品のなかには《海岸風景》のように修復が必要な作品がある。修復そして作品撮影のあと、満谷の収蔵品をまとめた小冊子を刊行したい。

図1：《裸婦》1895年 油彩・カンヴァス 90.9×42.2cm 2019年度寄贈

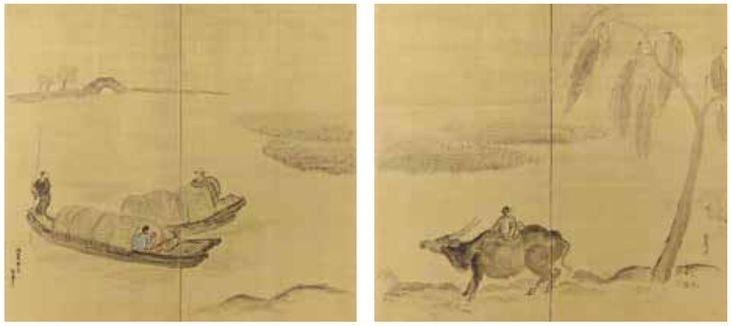


図2：《蘇州風景》二曲一双 1926年 絹本金地墨画淡彩 各167.5×185.0cm 2019年度寄贈

# 近現代岡山の美術家と キリスト教―定方塊石の場合

橋村 直樹（学芸課長）

図：香登教会礼拝堂（岡山県備前市）

目下、近現代日本美術史の中でキリスト教と関係する美術家や作品に注目し、明治から現代に至る日本の美術に及ぶキリスト教の影響に着目する展覧会の準備を進めている。同展では、キリスト教とかかわる岡山ゆかりの美術家や作品についても1章を設けて紹介するため、前号の美術館ニュースの「近現代岡山の美術家とキリスト教―坂田一男の場合」では、坂田一男とキリスト教との関連性についてまとめた。今号では、同じ「近現代岡山の美術家とキリスト教」のタイトルのもと、キリスト教主題の日本画を遺した岡山出身の定方塊石（さだかたかいせき）（1882-1966）について紹介したい。

定方塊石に関しては、今日作品が多く収蔵される、彼の母校である関西学院の学院史編纂室から、定方の生涯と作品一覧をまとめた研究[*1]が出されており、関西学院ゆかりの美術家として顕彰されている。また、定方が晩年に移り住んだ備前市香登にある香登教会には定方の作品が掲げられ［図］、基礎資料である定方伝の所収される書籍も教会から出版されており[*2]、香登教会の信者にとって身近な存在となっている。とはいえ、その名が知られるのは、主に関西学院や香登教会の関係者内であり、限定的であることは否めない。定方は、欧米遊学中の1922年のサロンドートンヌでただひとりの日本画の入選者として注目され、帰国後には富士25景の木版画を『塊石版画富士』として刊行するなど富士の画家としても活躍していたにもかかわらず、これまで美術史の文脈の中でほとんど注目されていない。それゆえ、ここでは、キリスト教主題の日本画を遺した稀有な日本画家であり、敬虔なクリスチャンであった定方塊石の生涯と画業について紹介したい。

現在の岡山県真庭市久世に生まれた定方塊石は、本名を末七郎といい、のちに塊石、耀慶、大塊と号した。幼少期より絵の道を志すとともにキリスト教に接し、高等小学校を卒業後、岡山市内の岡山教会の薇陽学院に入学するも、ほどなく同校が廃校となったため、神戸の関西学院に転入した。学院生活を送る中、絵を本格的に学ぶことを望んだ定方は、当時の関西学院長の吉岡美國に相談し、彼の紹介によって京都の日本画家の巨勢小石に弟子入りした。のちに定方の岳父となる巨勢は、自らはクリスチャンではないからキリストの絵を描くことはできないが、定方には信仰があるから、いずれはキリストの真の姿を日本画で描くようにと勧めたのであった。

関西学院を出た後、日露戦争に従軍して1904年の三塊石山の攻防で武功をあげ、復員すると、引き続き、巨勢のもとで研鑽を積んだ。その間、巨勢の四女徳子と結婚し、巨勢が宮内庁から受けた昭憲皇太后大喪儀絵巻の仕事も手伝った。1922年より3年半欧米を歴訪し、先述のように、22年のサロンドートンヌにおいて藤田嗣治らとともに入選を果たした唯一の日本画家として称賛された。そして遊学の最後に聖地エルサレムを訪れ、キリストの足跡をたどり、信仰によって心に宿したキリストの姿を祈りを込めて描かねばならないと確信して帰国の途についた。帰国後は、京南教会で教会活動を行いながら画業に専念し、1930年には京都から東京へと居を移し、耀慶と号してキリスト教主題と富士の絵を描き続けた。1945年3月に東京大空襲によって自宅を失ったため、関西学院で知り合い終生の友人となった武用五郎辺衛の家族を頼って香登へと移り住んだ。香登時代は大塊と号し、亡くなるまで祈りとともに絵筆をとり続けたのであった。

定方の作品は、上述のように、関西学院にまとまって収蔵され、準備中の展覧会では、同学院所蔵品の中からキリスト教主題の軸作品3点を拝借して展示する予定である。巨大な正面観のキリスト像である《平和の基督―基督御聖像―》をはじめ、祈りとともに描かれた定方のキリスト教主題の作品をご覧いただきたい。

＊1：伊藤笙子、井上琢智「一七 定方末七郎（塊石）」『関西学院史紀要』第16号、2010年、183-200頁

＊2：藤原謹一『聖徒のあしあと』香登教会、1976年

# 新収蔵品紹介

## File 26

李 侖京
《moment of glory》
《bloom 2023#a》
《bloom 2023#b》

古川 文子（学芸員）

《moment of glory》2022 PPシート、金箔糸、金糸、針金、オリジナルテクニック 本館蔵

李侖京(1978-)は、韓国ソウル生まれ。2001年に韓国の暻園大学衣装デザイン科を卒業後、日本に留学し、2011年に岡山県立大学工芸工業デザイン学研究科修士を修了、2015年には倉敷芸術科学大学芸術研究科博士を修了している。繊維を素材に織りや染めの技法を活かし、平面から空間へと展開する造形表現で、2019年に第11回岡山県新進美術家育成「Ｉ氏賞」大賞を受賞した。2019年個展「2月の間」（Maronie／京都）、2020年「小舟によせる唄」（高梁市成羽美術館）など、岡山県を拠点に各地で作品を発表するとともに、2019-25年「ニシガワ図鑑」舞台美術（岡山）をはじめ、ダンスパフォーマンス等の舞台芸術とのコラボレーションにも積極的に取り組んでいる。

《moment of glory》は、PPシートと煌びやかな金糸や金箔糸を用いたオリジナルの手法で、「舟」の形を織り出している。此岸と彼岸を渡す舟は、李の作品にたびたび登場するモチーフである。「第十一回I氏賞受賞作家展ウツシヨノカガヤキ」（2022年）では、銀色に輝く大小いくつもの舟と茜染めの絹布を巻き付けた橋の造形が交差する《渡し舟》や、ドライフラワーを乗せた赤い舟による《いつか咲いた花を》のインスタレーションが印象的であったが、本作では、金色の輝きを帯びた舟そのものの造形が、鮮やかに浮かび上がる。

《bloom 2023#a》・《bloom 2023#b》は、オーガンジーの素材と草木染の色彩を活かした手縫いの造形の透明感を際立たせるため、独自の技法で額装を施した連作である。繊細な布の質感と色彩のグラデーションにより、茜染めの赤色と藍の青色が美しい対比をなす。

織りと染め、それぞれの技法の魅力を活かした上記3点の作品は、李の代表作として2022年度に当館の収蔵となった。現在開催中の「岡山の美術 第1期」（2025年5月18日まで）では、《moment of glory》を重森三玲（1896-1975）がデザインした書院（復元）内に展示し、ご覧いただいている。青色が印象的な和の空間で、金色を帯びた舟の造形がひときわ鮮やかな輝きを放つ。

（左から）《bloom 2023#a》・《bloom 2023#b》2022
オーガンジー、草木染、手縫い 本館蔵

# 展覧会スケジュール

＊最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
https://okayama-kenbi.info

## 4月 April

4月11日|金|－5月18日|日|

### 【特別展】
### ベル・エポック―美しき時代
### パリに集った芸術家たち
### ワイズマン&マイケル コレクションを中心に

19世紀末から20世紀初頭のパリでは、美術工芸のみならず、音楽や文学など様々なジャンルで多様な文化活動が繰り広げられ、ベル・エポック―古き良き時代と謳われる。日本初公開となるワイズマン＆マイケルコレクションを中心に、国内に所蔵される優品を加えた約280点の作品により、華やかなりし当時の文化の諸相を紹介する。

4月26日|土| 14:00-
記念講演会 「元祖リケジョ マリー・キュリー ベル・エポックの科学、芸術と女たち」
講師 川島慶子氏（名古屋工業大学名誉教授）
会場 2階ホール（当日先着、定員200名）※要観覧券

## 5月 May

4月11日|金|－5月18日|日|

### 【岡山の美術展】
### ときめきのボタンたち
### ―加藤コレクションから

岡山県赤磐市在住の工芸家・加藤喜代美氏が永年収集された、19-20世紀のボタン約8,000点を展覧します。当時の美意識と繊細な技術が込められた、多種多様な素材とデザインのボタンをご堪能ください。あわせて、加藤氏のレースコレクションもご紹介します。

5月11日|日| 14:00-
演奏会 「ミュージアムコンサート」
演奏 上月真子氏（オーボエ）、西室伸也氏（サックス）、仲村渠悠子氏（ピアノ）
会場 2階ホール（当日先着、定員200名）※要観覧券（半券可）

## 6月 June

5月27日|火|―6月29日|日|

### 【岡山の美術展】
### 備前細工物 古備前から現代まで

備前焼の造形ジャンルのひとつである細工物を特集。古備前から近代の金重陶陽や三村陶景らの作品、そして現代における新たな造形表現としての細工物を紹介する。

### 収蔵品の紹介 Vol. 19

坂田一男《坐る女Ⅲ》
大正15（1926）年
油彩・カンヴァス
91.0 × 59.0 cm

ベル・エポック（美しき時代）と対比して、レ・ザネ・フォル（狂騒の時代）と呼ばれた1920年代のパリに留学した坂田一男は、アカデミー・モデルヌでフェルナン・レジェに師事した。レジェの教室では、モデル台に座る女性と壺や椅子などの静物とを組み合わせて描くことを繰り返していたが、本作は、そうしたレジェのもとでの学びから生まれた作品である。（橋村）

## 館長コラム

### 会計年度任用職の学芸員

守安 收

ここ何年か、当館では幾度も「学芸員募集」を行うという異常な事態に見舞われています。現在4人いる会計年度任用職員（非常勤で任期1年、再任可）の学芸員募集なのですが、いつも探している感が強く、よほど待遇や職務内容が悪いのだろうと疑われても仕方がないような気がします。この3月にも2人の会計年度学芸員が退職し、4月からは他館で正規職員として勤務することになりました。洪性孝氏（在職3年）は民間企業から転職し、音を展示するという難しい「藤原和通」展には最初から取り組んで実現し、倉敷の大原美術館へ。鈴木恒志氏（同4年）は仏教美術を専攻する大学院生でしたが、近代日本画にも造詣を深め、また「北斎と広重」展を成功に導き、岐阜市歴史博物館へ。彼らは館ニュースや図録の執筆、マスコミへの再三の登場などから皆様にもお馴染みのはずです。館への貢献度に比べ、身分が不確かで給料を筆頭に待遇面で報われない職分から難関の採用試験を経て解放された彼らを私は感謝の念とともに送り出しました。▼当館では、会計年度であっても適性を見極めながら時期が来れば常勤の正規職員と変わらぬ仕事を受け持ちます。資質に加えて努力が必要なことはもちろんですが、スキルの上達が速く、数年でどこに行っても通用する能力と向上心に溢れる学芸員に成長していきます。▼彼らが正規職員として勤めてくれたら当館は安泰なのですが、それは夢物語。私は彼らが新天地で活躍し、岡山県美から来た学芸員は「できる、役に立つ」という評価を得てほしい。そして彼らを介して、互いの館がよりよき交流ができるようになることを望みます。ともあれ、わが館の戦力大幅ダウンは必至。他館のための養成機関という現状に焦るばかりです。

岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814　岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800　FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
https://okayama-kenbi.info

交通案内　JR岡山駅後楽園口（東口）から
・徒歩15分
・路面電車　東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス　四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩3分
・岡電バス　藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間　9:00―17:00（入館は16:30まで）
夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日　月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

### 編集後記

中西ひかる

本誌の見開きを飾った「ベル・エポック―美しき時代」展の開催にあわせて、2階展示室では岡山の美術特別展示「ときめきのボタンたち―加藤コレクションから」を開催しています。本展では、19-20世紀につくられたボタンを中心に、同時期に手編みで制作されたレースのコレクションも紹介いたします。また、会場内ではお題のボタンを探すワークシートの配布もおこなっておりますので、ご観覧の際はぜひ挑戦してみてください。同じ機能を持ちながらも、様々な材質でつくられた個性豊かなボタンの世界をどうぞお見逃しなく。

ISSN 0916-9466
美術館NEWS 第148号　発行｜2025年4月